

礼拝堂の扉をあけたとき、祭壇にいる言峰が見えた。

ギルガメッシュは無言で扉を閉じ、目のまえに広がる夜の静けさを見せる。言峰はいつものように背を向けているが、こちらに気づいているのは明らかだった。

闇のなか、色硝子から差しこんできたわずかな明かりが礼拝堂を照らしている。こぢんまりとした部屋は、冷え冷えたとした厳肅に満ちていた。

通路に足をすすめると、靴音が高く響きわたった。祭壇に向かつて列をなす長椅子に模様が落ちかかり、薄く夜を宿している。

ギルガメッシュは顔をあげ、複雑な色合いに染められた色硝子を眺めた。瞼を閉じた聖母が慈愛に満ちた表情でこちらを見おろしている。この時間に礼拝堂に来るのはひさしぶりだった。そして、こうして言峰とここで顔を向きあわせるのも。

「夜遅くまでご苦勞なことだな、言峰」

礼拝堂の中央で立ちどまる。とたんに足もとから冷たさが這いのほり、心にいまだ残る殺戮の余韻を冷ます。

「好きで起きているわけではない」

言峰の声は寒さのせいか棘とげを含んでいるように聞こえる。

「それでは我われを出迎えるために待っていたと」

「他にどんな理由がある」

言峰がふりかえり、外套の布ずれの音が夜を揺らす。暗いながらも、ギルガメッシュには言峰の目が見える。冷たい目、長い沈黙を経てきた者の目だ。

「姿を晒さらしたな」

言峰の咎とがめに口端をあげて応じてみせ、

「それがどうした」

「待機していろと言ったはずだが」

ギルガメッシュは肩をすくめた。こちらの振舞いにも言峰は眉ひとつ動かさず、いつもの重い態度を保っている。自分でなければ、得体の知れない圧力に答えを押しつぶされていただろう。

「命令ではなく、要請と受けとったのだ。どちらにしても従う気はないがな」

「キャスターはおまえの仕業か」

文字どおり身を裂かれて笑いながら死んでいった魔女の、断末魔の狂気が耳に残っている。雑音を追い払うよう